

まえがき、あるいは、目次に代えて。

初めましての方は、ありがとうございます。n回目の人は、また私です。おはようからおやすみまで、あなたの二次元ライフをやたらめったら応援する方のフジカワさんこと、エロゲーのシナリオ屋・不二川巴人（ふじかわ ともひと）です。

このたびは、私の詩集『砦の前で』にご興味を示して頂き、誠にありがとうございます。えーっと、これは、詩です。小説ではありません。いわゆるひとつの、ポエムです。総計、五十二編。目次を作ろうと思ったのですが、めんどっちいのでやめました！（えー）どこから読んで頂いても結構です。それぞれが独立しておりますゆえに。

注意点としては、割と暗い作品が多いです。端的に言えば、病んでいます。人によつては、「イタイ！」と思われるかも知れません。そこんどこ、いっちょよヨロ？（いやに馴れ馴れしい四十歳）

では、また、あとがきでお目に掛かりましょう。
はじまり、はじまり……。

『塊くすべてののはじまりとして』

わたしのからだの中には
大きな塊がある

その塊は
わたしのからだを埋め尽くす

その塊は
さまざまに形を変える

その塊は
真綿となつて
わたしの心臓を締め付ける

その塊は
柔らかい掌となつて
わたしの心を撫でさする
しかし 指先に伸びた鋭い爪で
わたしの心を搔きむしる

その塊は
胃袋に膨れ上がり
わたしを 負の満腹感に満たす

その塊は
肺の中に膨れ上がり
わたしの息を詰まらせる

その塊は
わたしの喉に膨れ上がり
わたしの言葉を詰まらせる

その塊は
わたしの目に膨れ上がり
わたしの視界を 歪ませる

その塊は
わたしの頭に膨れ上がり

わたしの思考を奪う

その塊は

膨らみすぎて やがて

わたしの口から 溢れ出し

わたしに 意味を成さない音を発させる

その塊は

大きくくせに とても脆い

すぐに細かいつぶてになる

その忌々しいつぶてが

わたしの この 眩きの 素と なる

『琥珀の世界』

紫煙を吐き出し 外を見る
いや 何を見るわけでもないから
『そこに目を置く』

しばらく 景色を目に入れてみると
不意に それらが小さくなり
外の喧騒も 遠くに聞こえて来る

やがて 全ての景色が色あせ始め
一面 琥珀色の世界になる
そして 私の回りの 時が 止まる
そのうち 私の中の『俺』が心の闇から現れる

何がおかしいのか 薄笑いを浮かべて
突然『俺』は 大声で嗤い出す
全てを 呑み込まんとするほどに
狂ったように唯 吠い続ける

『俺』はひとしきり嗤うと

『私』をじろりと一瞥し

また薄笑いを浮かべて 闇の中へ消えて行く

そして私の回りの時が 再び 動き出す

短くなった煙草をもみ消し

私は『私』『として』 溜息の中へ戻る

『無題（あるいは、悪夢について）』

久しぶりに悪い夢を見た。いや、あるいはそれは、はっきりとイメージを伴った妄想だったのかも知れない。

おぞましい妄想だった。自分の頭がどんどん肥大していった、逆に、体がどんどんしぼんでいくのだ。どれほど大きくなるのか、どれほど小さくなるのか。わからない。破裂するイメージが夢の終わりなのか、妄想の中の命の終わりなのか。わからない。夢の見当は付いている。表す言葉は『頭でつかち』

見てきたことしか書けないくせに、全てを知るような物を書く。自分のことしか書けないくせに、皆を知ってるように書く。

そら！ 軋む音が聞こえるぞ！ 文字の狭間から！

そら！ 嗤い声が聞こえるぞ！ 画面の中から！

きりきりきいきい！ きりきりきいきい！

止める！ 自分は聞きたくない！

それでも聞こえるぞ！ 肥大した脳髓へ！

きりきりきいきい！ きりきりきいきい！

隠せ！ 惚けた笑い声で！

耳を塞ぎ目を閉じ！ じつとくまれ！

人生とは台風のような物だ

死という青空が見えるまで

うずくまって待っていけば！

ああ！ なんとという逃げ口上！

肥大した脳髓の思いそうなことだ！

聞け！ その音 軋む音を！

きりきりきいきい！ きりきりきいきい！

『めいそう』

どく…… どく…… どく……

目を閉じて 瞑想の真似事
巡る音 心臓の音
微かな 呼吸の音
巡る物 血液のはず
肺から入った 酸素のはず

どくん…… どくん…… どくん……

感じる 迷走する何か
何かある それ以外に
何かになりそうで
何にもなれない
けだるさのような
力のような
澱んだ空気のような
溢れる気力のような
どろりとした重々しい
身体を縛る 幻の枷
びく…… びく…… びく……

震える背筋
もがく骨髄
叫ぶ二の腕
血管の反乱
誰がやってる？
自分だよ

自分の中の何かだよ
抑えよう
できるか？
全て悟った名だたる坊主 名僧でもなけりや
できっこないさ
きつとみんなそう

がち…… がち…… がち……
合わない歯の根
溶けた思考

暴れている何か

いや……

『暴れている』

それが分かるだけ

自分はまだ 幸せなんだねえ

そうかな？

うふふふ…… うふふふ……

『無題（あるいは、悪夢について）』

お尋ねします。

「あなたはほんとうのあなたですか？」

……失礼。突然こんな事を問うたところで、戸惑うでしょうね。

えっ？ そんな陳腐な質問は、答える気にならない？ いえいえ、違います。解りました。順を追いましょう。

……今朝、あなたは目を覚ましました。誰も起こしに来ないことをいぶかしみながら。あなたは、家の空気が何か違うと感じました。自分の部屋と続いている隣の部屋。両親の寝室ですね。そこから何か、いやな空気を感しました。敷居の上、ガラス張りの部分から、何かが見えます。天井からぶら下がる、紐のような物です。あなたは、いやな予感とともに、敷居を開けます。するとどうでしょう、はたして、そこには首を吊って死んでいる、家族の亡骸が在るのではないですか。まさか!! そんな!! あなたはガチガチと震え、再び自分の布団に潜って泣きました。大きく、大きく、嗚咽を漏らしました。悲しみに暮れる中で、あなたは、ふと、昨日彼と交わした「最後の言葉」は何だったんだろうか? と思いました。けれども、思い出せません。あなたはそんな自分がいやで、さらに声を上げて泣きました。やがて、他の家族のことが気になり、あなたは階下へ降りました。暗く沈んだ部屋の中、他の家族も泣いています。あなたが話しかけると、涙でぐしゃぐしゃになった顔で、何かを叫びました。ひどく驚いているようです。これからの生活はどうなるのだろうか? あなたはまた、妙に冷静な気分で心配しながら、部屋に戻ります。するとどうでしょう。隣にあった死体は、あなたの部屋に在るではありませんか。あなたは心底驚きます。しかし、驚きを抑えて、死体の足元を見ると、何通かの遺書がありました。それぞれ、家族に宛てた物です。ですが、あなたの物がありません。なんだか悲しくなって、あなたは探しました。すると、自分の机の上に、ありました。ですが、家族なのに、表書きは姓名がきちんと書かれ『殿』の敬称まで付いていました。あなたはともかく封を破こうとしました。その時です。あなたは、ふと、こう思いました。

『あの死体は、自分ではないか』と。あなたは死体の顔を見ようとしています。が、朝日が逆光となってよくわかりません。ますます不安になります。家族の驚いた顔などがフラッシュバックし、あなたはますます混乱します。そしてあなたは……目を、開けた……ですって? さあ、本当に、そうでしょうか? どちらが、夢なんでしょう?

……さて。再び、お尋ねいたします。

『あなたはほんとうのあなたですか?』

『既視感（デジャヴユ）』

昔から、「既視感（デジャヴユ）」と言う物によく襲われます。

そう、不可逆の時の中で、何時だったか解らないけれど、今と寸分違わぬ行動、言動、気持ち……をした気がする……そんな感覚です。身体的原因として、疲労のせいだと言われます。しかし、こうもしばしば起きるとなると、そのうち妄想を抱くようになります。

それは、『輪廻』についてです。別に特別宗教的理屈ではなく、もつと、言ってみれば『怖さ』を伴った物と言えるかもしれません。そんな妄想です。

今、ここ、自分が存在しているこの場所は、ひよつとしたら一度ではなく、数え切れないほど繰り返されているんじゃないか？確かに「老い」と共に自分の中の「時計」は進むだろう。しかし、やがて「死」を迎えて、「自分が自分を認識しなくなった時」魂（あると私は考えています）は時空を越えて、「振り出し」に戻るんじゃないだろうか？あるいは、近親の者の軀に入るのではないだろうか？例えば、私が父親と食事時に、何気ない話をしているときなどは、そんな思いに駆られることがあります。そして、とても、怖くなるのです。

……さて、この妄想の答えは、一度「自分が自分を認識できなくなるとき」を待って、その次に「私」が「私」を「思った」時に、きっと、解るでしょう。

『空耳』

耳に聞こえる 空襲警報

何度も何度も 幻の

されど耳には 心地よく

嗤う気にすら なりにける

其はいずこより 聞こえる？

街から 人から 己から

聞こえる声

危ない 危ない 危ない 危ない

危ない 危ない 危ない 危ない

危ない 危ない 危ない 危ない

叫ぶ声

逃げろ 逃げろ 逃げろ 逃げろ

逃げろ 逃げろ 逃げろ 逃げろ

逃げろ 逃げろ 逃げろ 逃げろ

何の声

嗤え 嗤え 嗤え 嗤え

嗤え 嗤え 嗤え 嗤え

嗤え 嗤え 嗤え 嗤え

未だ聞こえる 空襲警報

私の耳に 聞こえくる

いつか現と ならんこと

怯え楽しみ 待ちにける

薄ら笑いを 浮かべつつ……